

国境の街すいぶん綏芬河

和田 奈良子

はるか遠い日に、綏芬河小唄というのを憶えた。

「風吹く夕ゆづ北満の、ポクラニーチナヤ（綏芬河のロシア名）の丘に立ち、見下ろす平野
クロテコの、ソ連のトーチカ仄見ゆる」

多感な頃で、そんな歌詞に惹かれ、いつか行ってみたいと思っていた綏芬河市は、無数の丘陵が波状に広がる山紫水明の里と聞いていた。

昭和二十年八月、ソ連の戦車隊が国境を越え、綏芬河にいた日本の部隊は全滅し、多くの将兵の生命が失われたのだった。

戦後四十三年経った八月十五日、私は初めてその地を訪れた。ホテルの窓から見える綏芬河の街は、緑の間に赤い屋根が遠く丘陵に続いていて、まるでヨーロッパの中世の田舎街を見るようだった。

午前六時、ラジオから流れ出るメロディは街中に響き渡った。第一日目の朝は日本の「北国の春」に始まり、タンゴ、シャンソン等も続き、音楽の快さが旅人に和やかな目覚めを与えてくれた。

かつて、ソ連のトーチカの見えた丘には、中国の辺防検査站（国境警備隊）があつて、そこから望遠鏡でシベリア鉄道を旅してきた列車を見ることが出来た。ゴム草履の片方の足を、窓に支えるように突っ張った姿勢で焦点を合わせていた隊員が、覗いて見ると言ってくれた。

「大丈夫かしら、本当にいいの」

「かまわないさ、あちらも見えているよ」

なんだかドキツとさせられる一言だった。この人たちは日本人には友好的で、隊員の一人にハルビン大学の露国語を学んだ青年がいて、今ラジオ講座で日本語を勉強していると親しく話しかけてきた。

案内してくれる人がいて、国境地点まで行くことが出来た。街への下り道を途中右折して検問所を過ぎ、しばらく行くと木立は切れた。急に視界が広がり、道は行き止まりになる。一面の低い夏草の向こうは、もうソビエト領だ。

国境線を示すものは何もない。簡単な木の柵の手前に、小さな木造家屋がある。会かい晤ぶ房ぼうといって、中国側の面会所である。そこから、一本の小径が二百メートルほど先の白い建物の、ソビエト側の面会所に向かつて続いている。お互いの用件が出来たときは、丘の上で合図が交わされ、互いの面会所に小径を通つて訪ねて行く。丘の上の望遠鏡はそのためのものだったのだ。

最近では貿易の商談が多く、中国側はソビエトから機械、木材を輸入し、ソビエトへは食料、薬品、雑貨を輸出しているそうだ。

左手に広場が見え、その真中に円形の花壇が作られてある。近付くと、たくさんなコスモスが咲いている。驚くほど美しい色の数だ。花壇の周りは毎日の手入れが行き届いてい

るようで、丁寧に入れられた箒の掃き目が見られた。ここだけが人工的で、まるで鎮魂碑を見る思いがした。

かつて、ソ連の戦車隊はここを越えたのか。目を閉じ耳を澄ますと、遠くに軍靴の音が聞こえるようだ。今もこの地には、数知れない将兵が眠っている。太陽は真上にあり、じっと立っていると体中が汗ばんできた。私は帽子を前に下げてハンケチで鼻のあたりを拭き替えていたが、とうとう眼鏡を外してしまった。もう涙が止まらなくなっていた。周りがのどかな田園風景であるだけに、余計悲しく、狂おしい気持ちになってきたのだ。

今はもう秋、冬の訪れの早いこの地方は間もなく一面雪に閉ざされ、この人たちはまた暗い冷たい眠りに入るのだろう。この人たちには、何十年経っても戦後はやってこないのだ。肉親にも、この存在すら知られていないのではないだろうか。

空は澄み通るほどの青空だが、雲も多い。緩芬河は、やはり日本からは遙かに遠い、国境の街であった。